

「特集 “ことば” 新研究」について

統計数理研究所 村 上 征 勝 (オーガナイザー)

学際的研究の重要性が叫ばれてから久しいが、現在、人文学と自然科学の分野にまたがる学際的研究は、どのように進められているのであろうか。

本特集は、“ことば”の分析を中心に、人文学と自然科学(特に統計科学とコンピュータ)の融合を図る学際的研究を紹介することを目的に企画された。

“ことば”に関する研究は、言語学や文学はもとより、宗教学、哲学、歴史学、心理学等の人文学の諸領域、意識調査等の社会学の領域において、それぞれ独自の研究スタイルによる長い歴史がある。

このような伝統的な“ことば”の研究に、統計手法を中心とした数量分析が取り入れられるようになったのは、今世紀(20世紀)の初頭である。1901年に、メンデンホールという地球物理学者が、シェークスピア=ベーコン論争(随筆家、哲学者、政治家であったフランシス・ベーコンが、ウィリアム・シェークスピアという名を使い『ハムレット』、『リヤ王』、『オセロ』、『マクベス』等の戯曲を書いたのではないかという論争)解決のために、“ことば”の長さの分布を調べた。この研究が、“ことば”に関する人文学と統計学の分野に於ける最初の学際的研究と考えられる。この研究に刺激され、その後細ぼそとではあるが統計手法を用いた“ことば”の研究が続いてきた。そしてここに来て、大きなうねりとなる兆候が見えてきている。というのも近年のコンピュータの著しい進歩により、大量の“ことば”のデータベースが構築できるようになり、加えて、安価で高性能のパソコンの普及により、比較的簡単に複雑な統計分析ができるようになった為である。“ことば”の分析は新たな段階に入ったといえる。

本特集の著者の方々は、統計学、国語学、国文学、コンピュータ・サイエンス等の領域において、“ことば”に関する学際的な研究を積極的に推進している方々である。“ことば”の学際的な研究の面白さを十分知っていただけるものと思う。